

---

# 荒れ鷹

雷華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

荒れ鷹

### 【Nコード】

N7310L

### 【作者名】

雷華

### 【あらすじ】

そこは剣と魔法と機械が混在する世界。

人が作り出した「機械兵」は世界の大半を荒野へと変えてしまった。荒野には数多くの遺跡が点在していたが、同時に「機械兵」も多く存在した。

人々は「機械兵」に怯えながらひっそりと暮らしていた。だが、一部の勇猛な人間は遺跡に眠る宝を求めて荒野へと入って行く。

彼らは「荒れ鷹」と呼ばれ、その数は日に日に増していくのだった。

時にその粗暴さを忌み嫌われ、時にその勇敢さを讃えられ、「荒れ鷹」は世界に浸透していった。

町から町へ旅する少女 ミティーは「荒れ鷹」を憎んでいる人間である。

故に彼女は自分を「荒れ鷹」と分類してはいない。

そんな彼女が立ち寄った町 クーオフクでは、彼女を狙う黒い影がうごめいていた。

何も知らず彼女に関わった人間は巻き込まれていく。

彼女が狙われる理由、黒い影の正体。

真実が明かされた時、彼女は決断を迫られる。

遙か古の時代に存在したという「竜」を巡る戦いが、今幕を開ける。

## 序章

そこは遙か彼方に存在する世界…。  
機械と魔法と剣が混在する世界…。

その世界に住む、「人」と「人の創りしもの」の争いは  
世界の大半を荒野に変えてしまった。

そして

荒れた大地は「人の創りしもの 機械兵」が彷徨し、人を襲う  
ようになった。

その為、人は荒野を避けるように沿岸へと移り住んで行った。  
荒野の危険性は、例え荒野を見なくとも理解できた。  
だからこそ、人々は荒野を恐れ、立入る事もなくなっていった。

め

だがしかし、その世界に住む人々の中には、荒野に眠る宝を求  
危険を承知で自ら荒野へと踏み出す人達がいた。

いつしか彼らは

荒野を自由に駆け回る様と、恐れを知らぬ勇ましさを鷹に例え

「あ 荒れ鷹たか」

と呼ばれるようになった。

## 【序章】

魔法とは自然の力を借り、己の内に在る力とを合わせ、それを思い描く形に具現化するものである。

機械とは鋼で作られた、自然…或いは人工の燃料を使って動かすものである。

機械と魔法 それは、この世界“デインス”には欠かせないものだった。

しかし、文明が発達するにつれ、人々は強欲になっていった。領土の拡大 そして財力の増幅という、身勝手な欲を満たすために、貧しい民を救うという大義名分を掲げてまで解放することが、世界の大半を巻き込んだ「戦争」という結末なのだ。

戦争とあらば、他国よりも強い戦力が必要になる。多くの武器や兵器が作られる中で、人はついに、禁断の行いだと言われた魔法と機械を掛け合わせるといふ、最凶の機械兵を創ってしまった。

それが、どんな結果を生むのかも考えずに。

鋼と魔法でコーティングされた体は、如何なる銃弾も寄せ付けず、それを手にした国は他国へと侵入を開始した。「機械兵」の姿かたちは様々で、人型のもの、獣型のもの、虫型のもの、鋼とワイヤのみのものもあった。

「機械兵」は人工脳を持ち、主の命令には逆らえないように作られていた。だが、人が作り出す物に、「絶対」という言葉はない。それはとても単純なことだったが、愚かな「人」はそれに気付かなかった。やがて、「人」は「機械兵」で軍隊を作り上げた。そして、ようやく気が付いたのだ。「機械兵」が暴走を始めた事によって。

まるで人工脳にウイルスでも侵入したかの如く、「機械兵」は次々と暴走を始めて行った。初めに国が滅び、そこから「機械兵」は徐々に破壊を繰り返し、大地を荒野に変えていく。戦術兵器として作られたがために、暴走した「機械兵」は本能で破壊を続ける。皮肉にも、その燃料は大地の気だった。破壊する度に、大地の気は吸い取られ、荒野となる。

だが、「人」も破壊を黙視しているわけではなかった。「機械兵」を倒すために、「人」は武器を手にとった。

やがて、「人」は勝利を収めた。長きに渡る戦いで大地はその多くを荒野と変えてしまったが、「人」は勝ったのだ。後世はこの戦いのことを、「魔機大戦」と呼んだ。そして、「機械兵」は荒れ果てた大地の下に埋もれていった。

月日は流れ、大地に少しずつ精気が戻り始めると、「機械兵」が再び現れた。人々は絶望し、町を捨てて逃げ始めた。「機械兵」は息絶えたわけではなかったのだ。「人」が勝利を収めたわけではなかった。結果的にそう見えたとしても、「機械兵」を殲滅したわけではない。「機械兵」が燃料切れを起こしていただけだったのだから。

「機械兵」は大地を再び荒野に変えていった。精気がなくなれば「機械兵」も動かなくなる。人々はそう思い、動かなくなった「機械兵」を破壊する計画を立てていた。しかし、「機械兵」の人工脳は進化していた。自らに宿る魔力の全てを注ぎ、「機械兵」は精気の代わりに生き物の血によって動けるようになってしまったのだ。

「機械兵」はあらゆる生き物を襲うようになる代わりに、荒野から出ることはなかった。何故ならば、生き物の血を求めるようになった「機械兵」は、精気のある場所へは近づくことすら出来なくなつたのだ。

荒野に残つたのは、「機械兵」達と、数多くの廃墟だけだった。

「機械兵」が徘徊する荒野に好き好んで近づく「人」はいなかった。だが、ほんの一握りの「人」が、廃墟に残されただろう宝を求めて荒野へと踏み入るようになった。その半数が「機械兵」に殺されてしまったが、何人かは生きて戻って来た。その手に光り輝く宝を持って。

「人」の欲は限りがない。その命を危険にさらすことになっても、富と名声が欲しいのだ。そうして「人」は今日も荒野へと足を踏み入れる。

## 第1部 黒い影

### 第1部 黒い影

荒野を目指し

人は出会い、歩んで行く

狙われし者との

出会いが生むのは

静かなる変化

### 【初見の章】

港町クーオフク、そこは「機械兵」に滅ばされた国“イソロッパス”に残る10の都市のひとつであり、荒野へと旅立つ命知らずの通過点でもあった。立ち並ぶ建物はレンガ造りの民家や商店ばかりだが、この町には一際目立つ建物があった。それは鋼でできた5階建ての建物で、町のほぼ中心に位置している。今は無きこの町を支配下に置いていた王国が、海を見張る為に建て、この町に残した唯一の物だった。今でも海を見張る灯台として使われる一方、最上階より下は荒野へ向かう者達の管理所になっていた。一人で行く者、仲間と行く者、様々だが、生きて戻れる保証は無い。もしもの時に備え、荒野に出るものは、足跡としてこの管理所に登録していくシステムになっているのだ。また、旅の宿としても活用でき、連日連夜、多くの者達がここを訪れる。ここを訪れるのは荒野を探索することを目的とした「荒れ鷹」の他にも、荒野を通って他の町へ行く旅人などがいるが、その数はごく少数である。ここを拠点として動く「荒れ鷹」が多いことから、この建物はいつしか「鷹ノ巣」と呼



ばれるようになっていた。

「鷹ノ巣」には、その日も多くの「荒れ鷹」や冒険者が訪れていた。建物の中に入っすぐの所はホールになっており、床はガラス張りでになっている。1階のカウンターで案内を受け、2階の登録所で諸事項を登録すると、荒野へ続く道を通る許可証がもらえる。その許可証が無ければ、例えどれ程偉い人であろうが通ることは許されない。

「次！」

登録を行う3人の役人は次々と来る人々に苛立ちを隠せない。

登録所には毎日何十人という「荒れ鷹」や旅人が訪れる。しかし、許可証を出すことが出来る役人は3人しかいなかった。そのため、登録所は実質3つの部屋のみで行われている。登録には故郷や旅の目的などを細かく質問されるが、その個人の情報は厳重に保護される仕組みになっていた。厳しい条件下での仕事は誰にとっても辛いものである。

「ハア……ようやくあと一人か……。今日は少ない方だな。次！」

役人はため息を漏らして次の冒険者を呼んだ。

「失礼します」

それを聞いた役人は眉をひそめ、顔を上げた。別に失礼しますと言って入ってくるのが禁じられている訳ではなかったし、珍しい行為でもなかった。だが、役人はその行為よりも、むしろその人自体に驚いているようだった。

「……あの……？」

しばし呆然としていた役人は我に返ると、咳払いをした。そこに立っていたのは、まだ若い女だった。武器になるようなものすら持っていない。魔法を扱う者にしても、生身で魔法を扱うには膨大な魔力を消費してしまうため、それを補うために杖やロッドを必要とするはずだが、その女はその身とさほど大きくない袋一つだけである。「……お前、何も武器を持っていないのか……!？」

役人が驚いているような、呆れているような声を上げると、女は笑

った。

「私は魔法を使っんです。でも、魔力を補うのは杖やロッドじゃないんですよ」

女は役人の前まで歩み寄ると、右腕を役人の前に突き出した。

「杖やロッドに付いている魔力石が魔力を補うことは知っていますよね？」

私はその魔力石を腕輪にしているんです。…これがそうですよ」  
女の右手首には立派な装飾の腕輪がはめられており、大きな石が一つ付いていた。役人はそれでも疑いの眼差しを女に向ける。

「…信じてないようですね。いいでしょう。“焰よ、わが声に従え”」

掌を上に向け、女がそう唱えると、腕輪の石が赤く光り、女の手に青い焰が現れる。

「これでどうですか？」

笑みを浮かべる女に、役人も納得せざるを得なかった。

「解った…。座れ。これからする質問には正直に答えろ。」

個人の情報は外へは漏らさないから、安心して話すんだ」

女が椅子に座ると、役人は机上の紙に何かの番号を書き綴った。

「まずは…名前、性別、年齢、出身地からだ」

女は素直に頷くと、口を開いた。

「名は“ミティー”、“ミティー・シューコア”。見ての通り女です。」

年は20になったばかりで、出身は“ティーンク”です」

彼女の言ったとおり役人は紙に綴っていく。

「“ティーンク”とは…また随分外れから来たものだ。」

この大陸を半周したんじゃないのか？

荒野を通れるのはこの町で許可証を得た者だけだからな。

職業は魔法使い…でいいんだろう？」

わざわざ証拠まで披露したのだから当り前だと、役人は答えを聞く前に紙に書いてしまっている。ミティーは何か言いたげだったが、

諦めたのか何も言わない。

「家族や恋人は？」

「家族は私を含めて5人です。両親と姉が2人。…恋人はいません」  
役人は正直だと感心した。大抵の人間はこの質問に怒りを見せる。

「恋人がいたからどうした」と。だが、ミティーは少しだけ眉を寄せるだけで、すぐに質問に答えた。

「お前みたいな奴らばかりなら、話も早くて助かるんだが…」。

あーっと、最後だ。荒野へ入る目的を言え。…表向きではなく、正直にな」

ミティーは一度目を瞑ると、一呼吸おいてからゆっくりと瞳を開けた。

「世界の至る所を回り、世界を知りたい…」。

荒野に入るのは、その第一歩だと考えてます。それに…人を捜しているんです。

この二つが私の旅の目的ですね」

役人はミティーの瞳を凝視した。長くこの仕事をしている役人達は、相手の瞳を見ればそれが嘘か真実かを見極めることが出来る。迷いの無い真っ直ぐな彼女の瞳は到底嘘を言っているようには見えない。それを確かめると、役人はその旨を紙に書き出し、最後に自分の名前らしきものをサインした。

「…よし、合格だ。これが登録書と『鷹ノ巣』を利用するに当たったの注意事項、

それと荒野の詳細を記した地図だ。…当然『鷹ノ巣』に寝泊りするんだろ？」

書類一式を手渡しながら、役人は言った。しかし、ミティーは首を振り、口の端から笑みを消して答えた。

「いいえ。『鷹ノ巣』には泊まりません。…『荒れ鷹』の泊まる所にはいられないです。」

私は『荒れ鷹』が嫌いなんです」

その瞳は冷たく、憎しみさえ宿っているように見える。役人はミテ

イーの態度の急変をいぶかしむばかりだ。

「…そうか。金があるのなら強要はしない。人それぞれに事情はあるものだからな。」

私は“クーザック・サティーア”この町で何かあれば私の所へ来てくれ。

出来る限り力になろう。…良い旅を、ミティー・シューコア」

ミティーは立ち上がり、その場で一礼した。

「ありがとうございます」

クーザックが笑顔を返すと、ミティーはその部屋から出た。その時、両隣の部屋からも荒野に入る許可証を持った冒険者が出てきた。

彼女の左隣の部屋から出てきたのは剣を腰に下げ、大きな袋を持った黒い短髪の青年で、右隣から出てきたのは同じく腰に剣を下げ、手荷物を持たない銀の短髪の青年だった。ミティーは二人を一瞥すると、足早に階下へと降りて行ってしまった。二人の青年はその様子を呆然と見送っている。二人とも思う所は同じで、ミティーが武器を所持していないことに大きな疑問を抱いていたのだ。やがて、二人の青年の視線がぶつかり、黒髪の青年が声をかけようと近付いた。しかし、銀髪の青年はそれに気付きながらも、半ば無視をする形で階下へと降りて行く。残された青年は不満そうに眉をひそめ、自分も階下へと降りていった。

## 【仲間の章】

「鷹ノ巣」は3階以上が宿泊所として使えるのだが、3階へ行くにはそれ専用の階段を昇らなければならない。その階段は、1階の受付横にあるが、2階へ行く階段とは別なのだ。よって、3階へ行く者は2階で登録を済ませた後で、1度1階に降りなければならない。

ミティーが登録を済ませ、1階に降りてくると、そこには登録を

済ませた人々が幾つかの輪を作って話し込んでいた。特に興味を持たなかった彼女は、何も考えずにその横を通り過ぎようとした。

「あっ！あのっ、すみません！」

小刻みに走り寄る女性に、ミティーはとりあえず、足を止める。その女性は薄水色のワンピースを纏い、同色のボレロを羽織っていた。その手には杖を持っており、ひ弱な感じからも、彼女が魔法使いであることは明白だった。こげ茶色の髪は肩に掛からない程度の長さで、前髪が少し目に掛かっている。瞳も髪と同色で、優しい輝きを放っていた。

「…何か用ですか？」

うつすらと笑みを浮かべ、ミティーが聞き返すと、その女性は少し戸惑った表情で、口を開いた。

「あ…あの…その…、よければ、一緒に来てくれませんか？」

私、魔法使いなんですけど白魔法しか使えなくて…。

ここにはたくさんの人が来ると解ってたので、仲間を捜してるんです」

呆氣に取られた表情で、ミティーは女性を見つめた。確かに、この「鷹ノ巣」に来れば同じ目的を持った仲間が大勢訪れるだろう。だが、それであっても、攻撃する術を持たない白魔法使いが一人で荒野に踏み出すということは、あまりにも無謀だった。

白魔法というのは、個人に眠る自然回復力を最大限に引き出し、一瞬のうちに傷を治してしまう回復魔法や、自然の力を借りて浮遊したり、瞬間移動をしたりする補助魔法を得意としている。攻撃魔法も全くないわけではないが、それを扱えるのはごく一部の人間である。

魔法使いは扱う魔力石によって魔法の種類が異なり、黒水晶は黒魔法を、白水晶は白魔法が扱える。その女性の手に握られている杖には白水晶が光っていた。彼女が特別な存在でない限りは向かって来る敵をなぎ倒す攻撃魔法を使うことは出来ない。

「…後ろにいるのは…仲間じゃないんですか？」

彼女はすでに何人かの仲間を集めていたらしく、彼女を見守るように3人の女性が立っている。内気なのか男性と話すのが苦手なのかは解らないが、彼女は女性にだけ声をかけているらしい。

「あ…そうです。黒魔法使いと弓使いと盗賊なんですけど…」

剣とか直接攻撃の出来る人がいないんですよ」

につこりと笑顔を見せる彼女に、ミティーは頭を抱えた。いくら本当のことでも、せめて“短剣使い”とも言えばいいものを、正直に“盗賊”と言う彼女に返す言葉が見つからない。

「…あの…どうかしましたか？」

そして、当の本人は解っているのかいないのか、きょとんとミティーを見つめている。

「い…いえ…。でも、私、武器を持つてるように見えます？」

両手を肩の高さまで上げ、ミティーは苦笑した。

「…あ…。で…でも、武器も持たずに荒野に行くなんて無謀ですよ」  
白魔法のみでここまで来た君に言われたくはない、などとも言えず、ミティーは右腕の腕輪を見せた。

「これ、ここに付いてる石は魔力石なんです。だから、私は魔法使い。残念だけど…」

女性は驚いたようにミティーを見つめ、残念そうに視線を落とした。  
「そうですか…。あ…でもでもっ、一緒に行きませんか？」

せっかく同じ目的の元に集まったんですしっ」

「…同じ目的…？あなたの目的は何ですか？」

ミティーは顔から笑みを消し、真剣な眼差しを向けた。

「私『荒れ鷹』に憧れてて…。荒野の遺跡を見て回りたいんです」

彼女が言い終わると同時に、ミティーは出口の方へと踵を返す。

「生憎ですけど、私は『荒れ鷹』が嫌いなんです。

…『荒れ鷹』で戦士なら、今、上から降りてきますよ、きっと」

「荒れ鷹」に憧れる人と行動するなどとは冗談にも言えない、とミティーは女性が止めるのも聞かずに出口へと歩き出した。

## 【疑惑の章】

「鷹ノ巣」から宿屋まではさほど遠くは無かったが、ミティーは遠回りをして街を回っていた。彼女にとって、これ程の大きな港町に来ることは久しぶりだった。大通りには幾つもの商店が立ち並び、そこで売っている物の種類も多い。

ミティーは掘り出し物を探しては、店の前で物欲しそうに眺めることを繰り返していた。だが、決して買おうとはしない。彼女はお金が無いわけではなかったが、無駄に金を使うことをしなかった。それと言うのも、彼女の目的である、世界を見て回ることを実現するためでもあった。ミティーは一つの店をくまなく見てから通り過ぎる事を繰り返していた。商売する側は売り上げにつながらないので、残念そうに彼女を見送る。

そうして、どれくらいの店を通り過ぎただろうか。ふと、彼女は一際目を引く装飾店の前で立ち止まった。そこは派手な売り出しもしていなく、質素に運営しているようだったが、置いてある商品にミティーは目を奪われていた。装飾や宝石と言ったものには人を惹きつける力を持つものもある。その類だったのだろうか、ミティーは特に豪華というわけではない、竜のペンダントに魅入っていた。指先大の小さな宝石を竜が抱いているようなデザインである。竜が抱いている宝石は一つだが、それは赤・青・緑・黄と見る角度によつて様々な色に見えた。

「…キレイ…」

ミティーはそのペンダントがどうしても欲しくなった。それほど高価なものでもなかったたので、彼女は久しぶりに大きな町へ来た記念として買うことにした。店主に金を払い、嬉しそうにペンダントを首にかけると、ミティーは再び歩き出す。

…それは我々のために買ったものか…？ミティー殿

彼女の頭に低く穏やかな声が響く。突然の声に、彼女は特に驚きもせず、そのまま歩いて行く。

そう…なるのかな…？…みんながいるから…尚更惹きつけられたんだと思うし…。

露店の並びが終わり、民家が点々とする通りに出る。点在する民家の間に何軒か店もあった。ミティーはそんな店のショーウィンドウを眺め始める。

ミティー殿が買われた竜の宝石は、普通の人間には無意味なものだ。

我々を召喚できる一握りの人間にのみ、貴重な品…。

魔力石が魔法を補うのと同じく、竜の宝石は竜を呼び出す際の負担を軽減する。

それまで至って普通に歩いていたミティーは、その時初めて表情を変えた。

魔力石と同じような効果があるの…？

ガラス越しに自分の姿を見つめていると、ガラスに映る自分の後ろに4人の青年が立っている。だが、実際の彼女の背後には誰もいない。

簡潔に述べればそういうことだ…。

これで、我々も今まで以上にお前の役に立てる。

ガラスに映る翠色の波打つ長い髪を持つ青年が笑みを浮かべた。



ありがとう…皆さんにはいつも世話をかけてばかりで…。ごめんなさい…。

悲しげに笑みを浮かべ、ミティーはガラスに軽く触れる。

謝ることはございません、ミティー様…。私達は貴方様の為ならば……。

澄んだ水色の真つ直ぐな長髪に、同色の瞳を持つ青年が困ったような表情で口を開いた。

「おい、お前…！」

水色の髪の青年は続きを言いかけたが、現実の声にミティーが振り向くと、口を閉ざし、ガラスに映っていた青年達も姿を消した。

「…はい…？…私ですか…？」

少し呆けた状態だったミティーは不意を突かれ、狼狽してしまった。「そうだ。…今、ガラスに男が映っていただろう？あれは何だ…！？」

声を掛けてきたのは、「鷹ノ巣」でミティーと同時に他の部屋から出てきた青年の一人で、荷物を持っていなかった銀髪の青年だった。彼の質問に、ミティーは困惑している。何しろ、あの4人の青年達はミティー以外の人間には今まで見られたことがなかったのである。それは気が付かなかったのではなく、青年達が特殊な存在であったがためだったのだが、今、目の前にいる青年には彼らが見えた。このことはミティーを大いに惑わす。しかし、正直に答える気など、彼女にはなかった。平静を装い、彼女は笑顔を見せる。

「男…って…通りを歩いてる人じゃないんですか？」

それに…男が映っていたからといって、私に何かあるんですか…

？」

もつともらしい質問で返し、乗り切ろうとしたミティーだが、青年は怪訝そうにミティーを見つめる。

「4人だ。その男どもがお前のすぐ後ろに立っていた。…ガラスにはな。」

だが、実際には誰も立っていないかった。それに…お前と話しているように見えたが…？」

ミティーは彼が見間違えたのだと思ったかった。だが、数も、そして話していたことも見られていては否定できなくなってしまう。

「あの…？私が誰かと話していたように見えました…？」

私はただ、店内を覗いていただけですよ…？」

苦しい言い訳だろうかと内心で考えながら、ミティーは迷惑そうに返す。だが、青年は諦めるつもりはないようだ。

「俺は確かに見た。お前と関係ないはずはない」

「いい加減にしてください！

私とあなたが見た男達と関係があったとして、それがどうしたというんです！？」

頼むから放っておいてくれと言わんばかりに声を荒げて、彼女は青年を見つめた。彼の銀の短い髪が風に揺らいている。その瞳は漆黒で、まるで全てを見透かすような印象を受けた。

「……いや…以前、どこかで見たことのある奴らだった。…それだけだ」

更に思いがけない言葉を聞き、ミティーは無防備なほど正直な感情を表に出してしまった。それは、誰が見ても明らかに動揺しているようにしか見えない。そして、彼はそれを見過ごさなかった。

「やはり…俺の見間違いではなかったようだな」

「何を…言っているんですか…？」

あなたの言ったような人達は私には見えなかったんです！…失礼します」

しまったと心の中でばやきながら、ミティーは早くこの青年から離

れたかった。これ以上話しているのは危険だと感じたのだ。だが、  
そう簡単には解放してくれないらしく、青年は彼女の左腕を掴んだ。  
「っ…何を…！」

「この俺を騙せるとでも思ったのか？何を知っている…？あいつらは一体何なんだ！？」

それを聞きたいのはミティーの方だった。あの4人の正体を知っているわけでもないというのに、何故この人には彼らが見えたのか。そして、以前に見たことがあるということは、どこかで彼女、もしくは彼らだけと会っているのかもしれない。様々な疑問が浮かびつつも、ミティーにそれを聞くことはできなかった。

「私は何も知りません！」

第一、知っていたとしても見ず知らずの人に話すことなんてないです！」

青年の手を振り解こうにも、さすがは男の力だけあり、ミティーに振り切ることはできない。

「…そうか…。それなら、こういうのはどうだ？」

俺は旅の傭兵だ。俺を雇え。金はいらん」

### 【襲撃の章】

青年は突然、信じられない発言をした。自分を雇えなどと言われ  
ても、ミティーは困るだけである。自分の身は自分で守れるという  
のに、あえて素性の知れない男と行動を共にする意味が解らない。  
何より、危険なことであった。

「そんな…急に言われても…」。

それに、私と来たって、あなたの言う男達が現れませんよ。私は  
…」

次の台詞を言いかけて、ミティーは青年の背後、遙か遠くで何かが  
光るのを見て口を噤んだ。その光は目を突くような眩しいものでは

なく、ミティーもよく知っている、魔法を放つ一瞬の光だった。そして、すぐにそれを立証するかのごとく、焰の塊が襲い来る。

右手を頭上にかざし、ミティーは焰の塊を睨み付ける。呪文など唱えている時間は無かった。もつとも、彼女に呪文など必要はなかったが。そして、次の瞬間、向かってくる焰の前に、水の壁が立ち昇った。それに焰が衝突すると、水が焰を包み込み、互いに消失してしまった。突然のことに、青年は驚いている。

言葉を失っていた青年は、ミティーの背後に迫る黒装束の男に気付くと我に返り、ミティーの腕を掴んでいた手を放し、剣を抜いた。そのまま、短剣を両手に持って襲い掛かってきた黒装束の男を、青年は躊躇なく斬り払う。

「…お前を狙っているな…。身に覚えはあるのか？」

地に伏して苦しむ男を足蹴にし、青年は肩越しに訊いた。だが、ミティーが答える前に、仲間と思われる黒装束の男が集団で現れると、青年は剣を一振りし、付着した血を払う。

「話は後だな…。お前は下がっている」

「…巻き込まれなくなったら、今すぐ立ち去ることをお勧めしますよ」

動揺する素振りも見せず、ミティーは苦笑いを浮かべる。この言葉に、青年は失笑してしまった。

「笑えない冗談だ。女一人を残して立ち去ることなんて、できるわけがない。」

いくらお前が魔法を扱えるとはいえ、あれだけを相手にはできないだろ？」

もつともらしく返す青年に、ミティーは嘲る様な笑みを浮かべる。

「ここまで私が一人で来れたのは、魔法の力があるだけじゃないんですよ。」

侮ってもらっては困ります。…私としては他人を巻き込みたくないんですが…？」

二人がそんなやり取りをしている中で、黒装束の男達は互いに相槌

を打つと、一斉に地を蹴った。

「…もう遅い！来るぞ！」

「やれやれ…仕方ないですね。私はミティー・シユーコア。あなたは？」

観念したミティーは自ら名乗った。ようやく前進したことで、青年は笑みを浮かべる。

「クライシールド・ミーヴルだ。…クライスでいい」

改めて剣を強く握り直し、クライシールドは正面を見据えて名乗り返すと、目前まで迫ってきた男達を睨み付け、敵をギリギリまで引き付ける行動を取った。さすが傭兵というだけあり、戦い慣れしているようだ。

そんなことを思いつつ、ミティーは先程の焰が飛んできた方向を見た。あれだけで攻撃が終わるはずはない。魔法を扱えるのが一人とも限らない。必ず次の攻撃をしてくるだろうと、神経を研ぎ澄ます。

すでにクライシールドは男達と剣を交えている。だが、斬り倒された男達が増えるだけで、苦戦する様子は全くない。四方八方から来る短剣の攻撃も、あるものは剣で払い、またあるものは体を捻ることで避けている。しかも、ただ避けるのではなく、必ず避けた先で攻撃を繰り出しているのだから、抜かりがない。

「…おい！何をボケツとしてるんだ！」

誰もボケツとなんかしていないと答えない気持ちを抑え、ミティーは右手を頭上に掲げた。すると、腕輪が白い光を放ち、更にその光が長い棒状を形作る。彼女がそれを握り、軽く振り下ろすと、淡く光り輝いていた棒状の物は銀色の槍へと姿を変えた。

「見た所、私の助けは要らないように思えたんですけど…？」

得意そうに笑顔を見せるミティーに、クライシールドは言葉を失った。今、彼女のしたことは明らかに、「魔法で物を作り出す」行動だった。彼にとっては初めて見るものであり、また、そんな魔法が存在していたことすら知らなかったのだ。

「物質化の魔法…貴様は紛れも無く、ミティー・フェンシユーコアだな！」

男の一人 恐らく一連の黒装束の男達を率いている首領格だろうが憎々しげに叫ぶと、ミティーの表情が強張る。そして、次の瞬間、怒りを見せた彼女を取り巻くように強い風が吹き荒れた。

「『フェン』の名は捨てたの…！私はあんた達が捜しているような人間じゃない！」

クライシールドには話が見えなかったが、まずは迫り来る敵を倒すことが先決だった。

「ククク…何とでも言うがいい。だが、我々は諦めない。

初めて貴様と会った時から、その力を欲していた。

再び見えることが出来て嬉しいぞ…！」

男は感極まったように語ると、両手に片刃の剣を持ち、襲い掛かってきた。

「…言いたいことはそれだけだな？」

真っ直ぐミティーを目掛けていた男は彼女の前に、クライシールドが立ちほだかると、男は一旦立ち止まった。

「お前は…」

怪訝そうにクライシールドを眺め、男は鼻を鳴らした。

「俺が誰であろうと、お前には関係ない。…そうだろ？」

クライシールドがそう返すと、男は彼を睨み付けた。

「…何も知らずに戦っているようだな。馬鹿な男だ」

「どういう意味だ…？」

自分が見下されていると思い、クライシールドは男に剣を向ける。

「何も知らないという事が、どれほど残酷か解っていない」

嘲笑する男に、クライシールドは怒りを抑えることが出来なかった。素早く一薙ぎした剣を、男は高く跳躍してかわした。上空で男が指を鳴らし仲間に合図を送ると、待機していた男達が一斉にミティーへと向かって走り出す。

「っシユーコア！」

クライシールドが男と話している間に、仲間はクライシールドから離れ、迂回してミティーの近くまで移動していた。それに気付くのが遅れ、彼は叫ぶが、当の本人は平然と槍を構えている。

「まだまだ注意力が足りないですよ。気をつけてくださいね。」

そいつはこんな奴らとは比べ物になりませんから！」  
彼に対して忠告までするほどの余裕を見せたミティーは、男達を凝視した。まずは正面から向かってきた一人の懐に入り、腹部を突きすると、続いてそれを抜いた反動を利用して後ろから迫ってきた男を柄の逆端で突く。二人が同時によろめくと、一瞬周りを確認してから、槍を横に倒し、薙ぎ払う形のまま、彼女は一回転した。刃の軌跡は光を残し、やがて衝撃波となつて男達を弾き飛ばす。

ミティーの戦う姿を横目で確認していたクライシールドは、驚きを隠せないでいた。流れるような動きにはさほど無駄は感じられない。

（あいつ…一体何者なんだ…！？）

彼はミティーがここまで戦いに精通しているとは思っていなかった。彼女が自分を「侮るな」と言った事を思い出し、彼はまさしくその通りだと息を呑んだ。だが、感心している暇など、彼には無かった。「他人よりも自分の心配をした方がいいのではないか？」

男が左手の剣を強く振り下ろすと、クライシールドはそれを自分の剣で受けた。しかし、もう片方の剣が容赦なくクライシールドの足を狙つて薙ぎ払われる。彼は後退するしかなかった。

「お前こそ、お仲間がみんなやられてしまうぞ…？」

少々押され気味でありながら、クライシールドは平然を装っている。思っていた以上に相手に隙がなく、彼は反撃の機会を窺いつつも、できないでいた。

「我らの目的は一つだ。それを達成するためにはどれ程の犠牲が出ようが構わない」

冷酷な瞳でクライシールドを凝視し、男はそう吐き捨てた。

「目的…そのためなら手段は選ばない…ということか…」

クライシールドは苦笑いを浮かべ、一瞬の間の後、剣を一振りした。その一閃で男の持っていた片刃の剣は綺麗な切り口を残し、折れてしまった。

「なっ……!？」

「お前は俺の一番嫌いな人種だ。…俺は嫌いな奴には容赦しない性質なんだ」

武器を失った男は悔しげに舌打ちすると、軽やかに後ろへ飛び退き、指笛を吹いた。

「…今日の所は引き下がるう。だが…我々は諦めない。

必ずや『竜の力』を手に入れてみせる！」

男の下に黒装束の仲間が集まると、男達は建物の屋根伝いに去って行ってしまった。遠くから狙っていた魔法を扱う者も、その気配が消えていることを、ミティーは確認していた。彼女の手握られていた槍は、光に包まれその姿を消した。やがて、彼女は天を仰ぎ、小さく溜息をついた。

## 【郷愁の章】

この街の宿屋は余程のことがない限り一杯になることはなかった。それと言うのも、訪れるのは殆どが「荒れ鷹」であり、彼らは「鷹ノ巣」を根城にする。「鷹ノ巣」は無料で提供されている「荒れ鷹」の公共施設であり、実は「荒れ鷹」ではない人も利用は出来る。そうなれば、わざわざ宿代を払ってまで宿屋に泊まろうと思う者などいないのが世の常なのだ。

「荒れ鷹」以外でこの街を訪れるのはせいぜい旅芸人くらいである。だからこそ、宿屋は客が来ると、これ以上ないほどもてなしてくれる。ミティーが宿屋に入った時も、例外ではなかった。しかも、彼女が訪れる前にはクライシールドが宿を取っていた。一日のうち二人も利用者がいるなど、普通では考えられない状況だった。



更に、ミティーはクライシールドとは別に部屋を取ったので、宿屋の主人は狂喜している。

「しばらく、ここを利用させてもらいますね」

「はい！お部屋は海が見える、一番良い部屋をお取りします！

どうぞよろしくお願い致します」

細かな所まで気を遣ってくれる主人に、ミティーは大袈裟だと思いつつも、嬉しかった。部屋に案内されると、確かに、よく海が見える部屋だった。まだ陽は高く、夕焼けに染まった海は見れないが、中々の景色を彼女は満喫した。

「…もういいだろ。そろそろ話してもらおうか？…お前の事情をな」  
せつかくのいい気分を台無しにしてくれたクライシールドに、ミティーは溜息をつく。やはり軽率だったかと、自分の行動に後悔さえした。わざわざ部屋まで付いて来た彼が何も聞かないはずはない。

「誰にだって、話したくないことの一つや二つありますよね？」

そう思っ、聞かないでくれるとありがたいのですが？

「……と言っても、そうですかと引き下がるような人ではないですよね。」

「じゃあ…一つだけ、あなたの質問に答えます。それで…今は…許してください」

悲しげな表情を浮かべ、ミティーがそう告げると、クライシールドは納得いかない様子だったが、小さく溜息を付くと、質問を考え始めた。

「…そうだな、聞きたいことは山ほどあるが…」

一つだけというのなら聞くことは決まった。

ただし、一つだけなんだから、正直に答える。『お前は何者だ？』

「やはりそれかと、ミティーは目を瞑り、少しの間俯いていた。他の問いならば正直に答えても良かった。だが、こればかりは正直に答えたくはなかったのだ。やがて、ゆっくりと目を開き顔を上げ、ミティーは覚悟を決めた。」

「解りました。…これから話すことは絶対に口外しないでください。それと、話したことで、あなたも狙われることになりますが…いいんですね？」

そんなことかと、彼は鼻で笑っている。だが、静かに頷くと、彼はミティーを見やった。彼女はベッドに腰掛け、溜息を付く。

「あの黒装束の男…確かに強かった。再び襲ってくるのなら好都合だ。

あいつは俺が倒す。…この俺に戦いを挑んで来たんだ。

このまま終わらせてたまるか」

そう話すクライシードがあまりにも楽しげだったので、ミティーは要らぬ心配かと呆れ果てる。傭兵という職業柄なのか、戦うことに一種の喜びを感じている様な雰囲気を感じたミティーは、要らぬ心配をせずに話すことにした。

「あなた…えーと…ミーヴルさん？も聞いたと思いますけど…」

「クライスでいいって言っただろ？」

覚悟を決めて話しを切り出したミティーは出鼻を挫かれてしまった。軽く咳払いをし、彼女は改めて口を開く。

「えっと…クライスさんですね。聞いた通り…」

「“さん”付けも敬語もいらない。堅苦しいのは苦手だ。肩が凝る」更に話を遮られ、ミティーは話すのを止めようかとも思った。

「解った！解ったから、まずは聞きなさいよ！」

思わず声を荒げ、本気で怒ってしまったミティーに、クライシードもさすがにしつこかったかと申し訳なさそうに頷いた。

「あの黒装束の男…確か名は“イヴル”とか言ったはずだけど。

あいつが私のこと、何て呼んだか覚えてる？」

やつとの思いで本題を進めると、彼女はまず確認のために彼にそう訊いた。

「ああ。…『貴様は紛れも無く、“ミティー・フェン”シユーコア”だな』

…って言ってたはずだ」

そんなことばかり覚えていられても嫌だったが、ミティーはとりあえず話しを進めた。

「そう…。私の本名は“ミティー・フェン”シューコア”。

きつと…クライスはこの名の意味までは理解してないと思うんだけど…？」

少々見下した言い方に、彼はムツとしたが、事実なので何も言い返せない。

「無理もないよ。…“フェン”っていうのはその昔栄えた王国の名前…。

魔機大戦が起こるよりも遙か昔にね…。

その頃は機械なんてなくて、人々は魔法に頼った生活をしていたの。

その力は今とは比べ物にならないほどなんだ。

…その中でも、国を治めていた王家の人々は更に絶大な力を持っていた。

ただ単に魔力が強いただけじゃなくて…特異な力を持っていたの。

それが“竜の力”…

クライシュードは黙って彼女の話を聞いている。恐らく、ここまで話しただけでも、彼は彼女が何者であるか薄々感づいているに違いない。ただ、それを話し続けるミティーの表情はとても哀しげで、無理をして語っている様だった。

「“竜の力”…っていうのは…その名の通り、“竜”を従わせることができるの。

…クライスは…“竜”…って知ってるよね？」

どこまでも見下した言い方だと、クライシュードは目を細めた。

「当たり前だ。伝説の存在、巨体に大きな翼を持ち、大空を飛び回り、焰を吐く。

今でもその強さと偉大さは“力”の象徴として様々な形で残されているからな」

そうだねと、ミティーは静かに頷き、続けた。

「フェン」が栄える…いや…人々が国を興すよりも太古の昔  
“竜”は確かに存在したの…でも、『人』は“竜”を殺してい  
った…。

ある者は自分の力を誇示するため…。

ある者は不老不死の妙薬となる“竜の血”が欲しいため…。

『人』が力をつけたことで、“竜”は絶滅の危機に陥った。

それを危惧し、手を差し伸べたのが“フェン族”と呼ばれる遊牧  
民だった。

…おかしいでしょ？ただの遊牧民だったんだよ？

でも、ただの遊牧民だから故に、彼らは“竜”を哀れに思った。

そしてまた『人』の愚行を悲しんだのかもしれないね…。

フェン族はね、元々魔力の強い部族だったの。だから、魔法がす  
ごく得意だった。

けれど、“竜”を護り続ける程の力はなかった…。

そこで“竜”は自らの血を一部の人間に与え、フェン族と契約し  
た。

“竜”は魔力で姿を変え、フェン族が国を興す手助けもしてくれ  
た。

…やがて“竜”は伝説の存在となり歴史の表舞台から消えていっ  
た…。

それでも“竜”を捜し求める『人』は完全には消えなかった。

だから、フェン国は“竜”を護る為に、自分の国を滅亡させてし  
まったの。

“竜”の手助けも借りて興した国を“竜”を護る為に滅ぼした…。  
その後“竜”の同意を得、フェン一族は“竜”を封印する方法を  
取った。

フェン族にしか解けない封印を、ね」

にわかには信じ難い話だったが、彼女がこんな話をでっち上げてい  
るとは思えなかったので、クライシールドは少々戸惑っていた。

「その…フェン族の末裔がお前だと…？」

「まあ…血生臭い話を吹っ飛ばして結論を言っちゃえばそうかな。  
…そうだね、詳しい話はまた今度にしようか…？」

『お前は何者だ』の答えは出たしね。質問は一つだけって言ったし」

切なげな表情や口調は消え、一変した笑顔でミティーはクライシユードを見つめると、おもむろに立ち上がった。

「？…どこ行くのか？」

壁に寄りかかり腕を組んでいたクライシユードも、ミティーが動く  
と体勢を整える。

「うん。ちよつと“荒野”まで下見に」

さらりと言つてのけるミティーに、クライシユードは一瞬驚きの表  
情を見せたが、それはすぐに笑みへと変わった。

「お前は本当に解らない奴だな。普通は休むだろ。来た日ぐらいは  
…」

「そう？いいじゃん、下見なんだし。本格的に動くのは明日からに  
するんだし。」

あ…そうだ。えつと…クライス、これからよろしくね」

照れくさそうに笑いながら、ミティーは右手を差し出した。

「…自分の身は自分で守れるんじゃないかったのか？」

苦笑いを浮かべながら厭味を返してくるクライシユードに、ミティ  
ーは言葉に詰まった。

「う…いや…だって…」

「冗談だ。雇ってもらえるならそれに越したことはないさ。よろし  
く、シューコア」

その言葉を聞くと、彼女は安心したように笑みを浮かべる。それか  
ら二人は固い握手を交わし、やがて宿を後にした。

## 【結末の章】

「あ…あのっ！私達、剣士を捜してるんですっ。良ければ、一緒に来てくれませんか？」

時間は少し遡り、荒野へ入る許可をもらい、ミティーが「鷹ノ巣」を去った直後のことである。ミティーとほぼ同時に登録を終え、2階から降りてきた2人の青年は、どちらとも無く声を掛けて来たその女性を前に立ち止まった。後にミティーと行動を共にする銀髪の青年 クライシールドは怪訝そうな表情を返し、興味がないのか、何も答えずに真っ直ぐ出口へと向かう。

「一緒に…って、何だよ、女だけしかないじゃないか。危ないなあ…。」

女だけで荒野に入ろうつてのに、見て見ぬ振りなんてできるはずないじゃないか」

何も聞かなかったように去って行ったクライシールドとは対照に、黒髪の青年は4人の女性達を一通り見回すと、笑顔を浮かべる。

「俺は“ティバロ・オターカ”、お望み通り『荒れ鷹』の剣士だ。

剣の他に魔弾銃も使うけどな。よろしく頼むよ。…あ…っど？」

「セフイーク”、“セフイーク・クーシオ”ですっ。

よろしく願います、オターカさん！」

嬉しそうにセフイークは名乗った。自らの憧れる「荒れ鷹」であり、捜し求めていた剣士であるティバロの登場は、彼女にとって、最高の人材である。

ちなみに、ティバロの持っている魔弾銃とは、魔法の力を銃の弾丸に込め、それを打ち出す特殊な銃のことである。ティバロはジーンズ、白いシャツというラフな格好に、冒険者特有のベージュ色の膝丈ほどのコートを着ていた。魔弾銃はそのコートの裏にホルダーがあり、そこに差してある。

「セフイーちゃんか…。後ろの方々のお名前は？」

これから一緒に行動するのに、名前も知らないなんて、笑えない冗談だ」

セフィークの後ろで特に口出しする様子も無く、おとなしく見守っていた3人の女性は互いに顔を見合わせた。

「私、“ユーク・カーウィン”と言います。黒魔法なら任せてください。」

それと、女4人の中に入るからには、…解ってますよね？」

につこりと人当たりのいい笑顔を見せつつ、ユークは、変なことを考えるんじゃないよ、という意思を目で伝えていた。

「……………あ…ああ、よろしく…」

すらりと長い指がきれいな、ユークの握手を求める手を握り返し、ティバロは引きつった笑みを浮かべた。

「アタシは“マティーナ・アミカ”。盗賊って言う奴が多いけど…、できればトレジャーハンターって言うてくれると嬉しいかも。」

短剣の扱いなら自身あるよ。飛び道具は百発百中だし…。

それに、素早さ！身が軽いつて言うのかな？まあそんなところよろしくね」

はきはきと喋るマティーナとも握手し、ティバロは最後の一人を見る。

「あ…私は“ライナ・ノーク”です。」

でも…ライナよりもレイナって呼ばれる方が好きです。

…何となく呼び方がかっこいいから。一応弓使いなんだけども…。たまーに的を外しちゃいます。私の前にいるときは気を付けてね。」

あと、私を街中とかで一人にしないでください。迷います、確実に。」

自他共に認める方向音痴なもので…」

この時、握手をしながら微笑んだティバロが「こいつが攻撃するときには前に出ねえぞ」と誓ったことは言うまでも無い。

「それで、出発はいつにするんだ？」

俺はいつでもいいから、セフィーちゃん決めてくれよ」

ティバロに促され、セフィークは困った。声を掛けたものの、いつ出発するかなど決めていなかったのだ。

「え…？わ…私が決めるんですか！？えと…じゃあ…明日…かな？私今日来たばかりだから…」

控えめに発言するセフィークに、ティバロは大きく頷き、悪戯めいた敬礼をした。

「解りましたっ、隊長！明日から我ら『荒野の調査隊』の活動開始ですね！」

「ええっ！？『荒野の調査隊』って何ですか！？しかも隊長って…」本気になって狼狽するセフィークに、ティバロは笑った。ちよつとした冗談だとセフィークをからかおうとしているのだ。

「面白そうだねえ。」

セフィーちゃんは私らを集めたから隊長で、私らは平の隊員ってことで」

ほんの冗談にユークが乗り気になると、マティーナとライナも笑いながら頷いた。

「うん、おもしろいよそれ。採用。ティバロ君、君はいいことを言うね」

どんどん話が進む中、最初に言い出したティバロは呆れた様子で話を盛り上げる3人を見ていた。そして、もう二度と彼女達の前で下手な冗談は言わないと、反省すらしていたのだった。

「鷹ノ巣」に用意されている部屋は「荒れ鷹」の増加により一部屋に5〜6人が入るようになっていた。「荒れ鷹」がまだ少なかった頃は一人一部屋を割り当てても部屋が余る程だったが、今では部屋数が足りなくなる始末である。だが、ほとんどの「荒れ鷹」は一人では行動せず、何人かで組んで荒野に入るので、その組・パーティ毎に部屋を割り当てるようになった。

3階から5階が宿になっている中で、間の4階には食堂も完備されていた。ただし、そこでの食事は朝以外は有料となっている。完全に無料で宿・食事等を提供できるほど、町の情勢が良いわけではないのだ。その食堂とは別に、酒場も同じ4階に設置されており、「荒れ鷹」達が戦いの疲れを酒で吹き飛ばすこともしばしばあるよ



うだ。

そんな「鷹ノ巢」の5階に、セフィークたちの部屋が割り当てられた。セフィーク、ユーク、マティーナ、ライナ、ティバ口の5人組ということで申請し、一つの部屋にしてもらった。女所帯に男が一人と偏った組編成だが、誰と組もうが自由なので、申請は簡単に受理してもらえる。

部屋が決まると、5人は早速そこへ向かった。部屋に入ると、5階ということもあり、窓からの景色が中々のものだ。ただ、海側の部屋ではないので、一望できるのは広大な荒野だけだったが。

「わあ…けっこう広いね」。荒野も見渡せるよ」

部屋に入るなり、セフィークは窓へと向かった。

「もつと汚いかと思ってたけど、まあまあやん」

小綺麗な部屋を見回しながら、ユークがそれなりに満足そうに言う  
と、マティーナもそれに頷いた。

「そだね」。あんまキレイなイメージなかったから、ちょっとびっくり」

早い者勝ちの如く、各々が寝台を選び、その上に荷物を置く。部屋にある寝台は6つで枕は壁側に置くよう統一されていた。奥から順に、セフィークとユーク、ライナとマティーナ、そして、一番手前がティバ口に決まった。更に、用意されていたついたてをティバ口の寝台の横に置き、女達とを区切る。

「…ちっ…用意がいいじゃねえか…」

悔しそうに呟きながら、ティバ口は横目でついたてを睨み付ける。

女達には聞こえないように呟いたつもりだったが、静かな部屋の中では筒抜けになってしまっていた。

「当たり前じゃないか。何を言っているんだね？君は」

ついたてと言っても、それ程大きいものではなかった。寝台の長さ分しか横幅はないし、高さも2mほどしかない。そんなついたてを挟んで、ユークは呆れたように返した。

「言われなくてもわかってるんだ、んなことは！

ちよつとしたネタじゃねえかよ。ネタ！」

本気にされては困ると、ティバロが反論するも、疑わしい目でユークとマティーナが睨み付けている。ティバロはそんな女どもに溜息をつくことしかできなかった。

「さて、個人個人で休む前に、明日について話しておこうか」

ティバロからセフィークに視線を移し、ユークがそう提案すると、セフィークも嬉しそうに頷いた。

「うん！楽しみだね。まずはどこ行こうか？」

笑顔でそんなことを言うセフィークに、皆は沈黙してしまった。彼女が一体何を目的として荒野を目指しているのかがまったく理解できない。

「…あのさあ…セフィークちゃん？」

「え…？何？」

「…君は何をしたいんだい？荒野に入る目的は？」

ティバロは正直に言うと、個人に立ち入ったことを聞くつもりはなかったし、それに干渉しようとも思っていなかった。だが、彼女はあまりにも無防備で、危険な荒野へと赴くというのに、計画すらない状態だ。さすがに、彼の性分からも放っておけるはずもなかった。

「え…？…面白そうだから…？」

再び沈黙が訪れる。

（こいつは危険な場所だってことを解ってるのか！？）

頭を抱え、ティバロは大いに悩んだ。

「…解った。それじゃあ、明日は近場から攻めて行こう。」

慣れない荒野の奥へ入るのは厳しいだろうからな。

…俺は以前に来たことがあるから、案内は任せろ」

前途多難だと思しながら、ティバロは立ち上がった。

「あれ…？どこか行くの？オターカくん…」

「ティバロだ。“オターカ”の方で呼ばれるのは好きじゃない。んで、そつちで呼んでくれるとありがたいかなあ。」

本題の行き先だけど、ちよつと飯を食いに行こうと思ってね」

一度寝台の上に置いた剣を取り、ティバロは扉に向かった。

「え？え？どうして？食堂は…？」

「…俺は食堂の飯は…好きじゃないんだよ」

苦笑すると、ティバロは部屋を出ていった。食堂の料理が口に合わなかったらしい。

「あ…あ、待つて。私も行くよ」

「セフィーちゃん、行くの？じゃあ、みんなで行こうか？」

「うん！」

ライナの提案に、セフィークはとても嬉しそうに笑った。皆は急いでティバロの後を追う。幸い、ティバロは「鷹ノ巣」を出てすぐの所で捕まえることが出来た。

「…何なんだい？君達は…」

呆れた表情で呟くティバロに、セフィークは相変わらずの笑顔で話し掛ける。

「一緒に食べよう？ティバロくん！」

「……ハア、隊長命令には逆らえません」

苦笑するティバロに、セフィークは何度か瞬きをする。

「え？隊長命令？…私そんなつもりじゃ…」

困惑するセフィークの反応に、皆は笑い声を上げた。

## 【来襲の章】

それは、レストランまでの道のりを5人で歩いてた途上で起きた出来事だった。皆の上を、前触れもなく焰の球が飛んで行った。背後から迫った焰の球は、奇跡的にも当たる事はなかった。とはいえ、突然の出来事に5人は驚いた表情で振り返る。

「え！？い…今の…魔法！？」

セフィークが動揺していると、すでにティバロは剣を抜いていた。マティーナも得意の短剣を構える。ユークは次の魔法に備え、ロッ

ドを手にした。しかし、セフィークとライナは食事だけということ  
で、武器を部屋に置いてきてしまったので、戦うことができない。  
まさか町中で襲われるなど思っていなかったのだ。

「町中で魔法を放つなんて、どういいう見だ！？ったく…」

「ご…ごめん、私、杖置いてきちゃった…」

緊張が走る中、セフィークの言葉はティバロをとことん脱力させて  
しまう。

「あー…もういいから、後ろにいる。絶対前には出んなよ？」

「は…はい…」

申し訳なさそうに謝るセフィークは、おずおずと下がった。

相手の魔法使いの姿がまだ見えない。だが、次の攻撃が来ると、  
ティバロは走り出した。先程とは変わって、氷の塊が飛んでくる中、  
彼はそれを避けつつ、魔法が放たれたと思われる地点を目指した。  
地を蹴り屋根を掴むと、反動を付けて屋根に登る。

一方、ティバロが避けた氷の塊はユークが焔の結界を張ることで  
防いでいた。マティーナも氷の塊が止むと同時に駆け出す。ティバ  
ロとは違う家屋の屋根に軽々と登り魔法使いを捜した。

「みんなすごおい！」

自分達が狙われているにもかかわらず、セフィークはそんなことに  
感心していた。

次の瞬間、辺りをまばゆい光が包むと、皆は一瞬、その光に目を  
奪われた。だが、その光は差すようなものではなかった。魔法を放  
ったときの光とも違う。

「今のは…！？」

「…！ティバっち…！いたよ！」

「誰がティバっちだ！誰が！」

変な呼ばれ方に怒りながらも、ティバロはマティーナの指す方を見  
る。そこには黒いローブを着た、魔法使いの集団がいた。どこかへ  
移動しているところのようだ。

ティバロは屋根の上を走り出し、魔法使い達を追い越すと、彼ら

の前に飛び降りた。

「…お前ら何モンだ？セフィーちゃんを狙いやがって…」

「貴様ら…貴様らもあの女…の仲間か!？」

「あの女…？セフィーちゃんのことか？ああ、そうだ」

魔法使い達はロッドを突きだし、呪文を唱える体勢を取る。だが、ティバロは剣を扱い、近距離戦を得意とするため、魔法使い達はどつあつても不利である。更に、魔法使い達の背後にマティーナが回り込み、退路を塞ぐ。

「…逃がさないよ。あんたらの目的は何!？」

「んなこたあどうでもいいさ。要は、こいつらをぶちのめせばいいだけだろ？」

剣を魔法使い達に向け、ティバロは口元に笑みを浮かべる。

“雷よ、ほとばしれ”!

魔法使い達が一齐に魔法を放つと、ティバロは走り出した。魔法に向かつていくのは無謀とも思えたが、ティバロは走りながら、うまく魔法を避けている。

マティーナも挟み撃ちにするべく、走り出した。ティバロは魔法使いの1人の懐に入り、剣を突き立て、それを後ろへ放り投げると、次の魔法使いに剣を振り下ろす。一瞬、ティバロは魔法使い達に笑みを見せた。更にすぐ傍にいた魔法使いを斬り払う。

マティーナは短剣ということもあり、深い傷を負わせる戦法ではなく、急所を狙った攻撃を中心に行っていた。素早く魔法使いの背後に回り、首を切り裂く。他の魔法使いが恐怖に駆られ放った焔を高い跳躍で避けると、そのまま落下し、肩から腰にかけて斜めに切り裂いた。

残るはあと3人となったところで、遠くから指笛が聞こえて来た。

「ん…？」

「くっ…退くぞ！」

「あ！待ちやがれ！」

逃がすまいと剣を振るティバロだったが、魔法使いは風に身を包み、

消えてしまった。

「一体何だったんだ…？」

辺りを見回し、ティバロは遠くの屋根伝いに黒い人影が走り去るのを目撃した。だが、それが魔法使い達と関係があるかどうかは解らない。魔法使い達の死体も消えてしまい、証拠は何一つ残されていなかった。二人は仕方がなしに、セフィークの元へと戻ることにした。

そのレストランは閑静で、食事に来ている人も疎らだった。宿屋同様、レストランにも同じように客が来ない。「荒れ鷹」が増加したことによって、武器・防具・道具屋等は繁盛しているが、生活に必要な食事や場所は提供されている為、宿屋やレストランといった施設は衰退の一步を辿っている。

その状況下で、レストランの中が閑静でないはずがない。しかし、そこには久々とも言える客がいた。5人という人数は決して少なくはない。何かしら会話が生まれ、人気のないレストランにその声を響かせてもおかしくはないはずだった。だが、その場には不自然なほど食器の音だけしか響いていない。

黙々と食事を続けるセフィーク達は、浮かぬ顔で料理だけを見つめ、互いに視線を交わすことすらなかった。黒いローブを纏った怪しげな魔法使い達との戦いの後、一行は予定通り、食事をする為にこのレストランに入った。静かで落ち着いた雰囲気、美味しい料理、満足すべき条件は揃っていたのだが、皆はここで満足できるほど納得してはいなかった。

結局、一言も交わさぬまま、皆は料理を食べ終えてしまった。食器が片付けられ、代わりに皆の前には食後の飲み物が置かれていく。「…さて、そろそろ話をしようじゃないか」

長い沈黙を破ったのはユークだった。柑橘系の飲み物の入ったグラスを手に、真っ直ぐにティバロを見据えている。

「何で俺を見んだよ…」

「『荒れ鷹』の中で、その名を知らぬ者はいないとまで謳われてるんでしょ？」

その“ティバロ・オターカ”くんの意見を聞こうと思ってね」  
不服そうに目を細めるティバロに、ユークは片時も目を逸らさず、答えた。

「…誰がそんな風に言ってるんだよ」

失笑するティバロだったが、こんな時には迷惑なだけだった。

「ま…いいわ。とりあえず、あいつらはセフィーちゃんを狙ってた。

“貴様もあの女の仲間か？” って言ってたしな。

多分他にも仲間がいたんだろう。遠くから指笛が聞こえた。

それであいつらは恐れを成して逃げ帰って行ったってわけだ」

まるで自分の力を誇示するかのごとく、ティバロは言った。

「指笛…ああ、何か聞こえたね。

でもさ、ってことはその仲間も遠くで戦ってたってことでしょ？

で、そっちにリーダー核の奴がいた。

んで、何かがあって不利な状況になり、指笛で撤退の合図を送った…。

こう考える方がよくない？」

冷静に推理した結果を話すユークに、ティバロは頭を掻いた。

「ああ？もしそうなら、そのリーダーが戦ってた奴って何なんだよ」  
誰も答えられるはずもない問いを、ティバロはあえて投げかける。

やはり、誰もが答えられず、再び沈黙が訪れるかと思いきや、マテイーナが突然立ち上がった。

「もしかして…そのリーダーが戦ってる奴の仲間だっと思われたんじゃない！？

“あの女の仲間か？” っていうのは、そっちで戦ってた奴の仲間かって意味だったんだよ！」

一番つじつまの合う意見を述べたマテイーナに頷きながら、ユークはティバロを睨み付けた。

「…ってことは、君は“女”」セフィークと勘違いし、仲間だと答

えたわけだよねえ？

その結果、あの黒い魔法使いどもにも勘違いされてるわけだ」

セフィークとライナは三人の会話をただ聞いているだけしか出来なかった。話を聞いていても、その内容を理解するのにも一苦勞である。

「あ…あのね、結局…あの人たちは何なの？」

セフィークは過ぎたことよりも、たった一つ、それだけが知りたかった。過ぎたことはどうにもならない。問題は、相手が何者で、何の目的を持っているのか、だった。

「この中の誰かの関係者でもないなら、確かなことは言えないけど。」

誰かの命を狙って動いている、ヤバイ奴ら、って感じじゃない？」  
マティーナはそう言っ、グラスに口を付けた。見る見るうちにセフィークが蒼白になっていくのが解る。

「元はといえば、ティバロくんが勘違いして答えるからいけないんだよ。」

これでこちらが狙われたらどうしてくれるんだい？」

ユークの言葉に、皆の視線がティバロ一人に向けられると、彼はたじろいだ。

「な…何だよ。俺一人だけ悪者か！？仕方ねえだろ！」

あいつらは俺達を狙ってたんだし、“あの女”としか聞いてないんだぜ！？

女4人に囲まれてる俺が、ちょっと勘違いしたっておかしくない！だから確認したんだよ『あの女ってのはセフィーちゃんのことか』って。

…まあ…奴らは答えなかったけどよ。どっちにしろ、過ぎたことだろ！」

「その“過ぎたこと”で私たちの命が危険に曝されるかも知れないんだよ！」

逆上するティバロに対し、ユークがテーブルを強く叩いて立ち上が



ると、セフィークは怯えるように身を竦ませた。

「まあまあ、ユーク、落ち着いて。」

要するに相手の誤解を解いて、私らは関係ないよって解ればいいんじゃないの？

そしたら狙われずに済むわけだし」

ゆったりした口調でライナが言うと、ユークはひとまず座った。だが、ライナの発言は楽観的というしかなく、実際にそれで済むはずなどない。

「…で？どうすんだよ。絶対、あれで引き下がるような奴らじゃないぜ。」

性質の悪い、ヤなタイプだ。

本当に狙われてる奴を見つけ出して、関係ないことを裏付けてもらうか？

それとも、来る奴を片っ端から片付けるか？」

ティバロは後者の方を強調していたようにも思えたが、どちらの方法を取るにせよ、無茶苦茶な方法だということだけは確かだった。

「ええ！？だ…だめだよ。そんなのお…」

困ったようにセフィークが返すと、ティバロは頭を抱えた。

「じゃあ、どうするんだよ？」

「見るからに怪しい奴らつてのは解るよね。」

もしまた来たら、その時は“あの女”とやらについて話してもらおうよ。

…どっちみち仲間、殺っちゃってるから話し合いは通じないかもしれないけどね」

肩を竦めて首を振るマティーナに、ユークが溜息を付く。

「誰かさんのせいで、大変なことになったね…」

「んだとっ！？」

ついに怒りを抑えきれなくなったティバロが立ち上がる。右手に作られた拳は、今にもユーク目掛けて振り下ろされそうだ。

「あ…あ、ティバロくん、落ち着いてっ」

うろたえながらも、セフィークがティバロの腕を掴むと、彼は小さく舌打ちして座った。

「ティバロくんだけが悪いわけじゃないよ。あまりいじめたら可哀相だよお」

セフィークの哀れみの言葉は、ティバロには逆効果だった。何か虚しい気持ちになったティバロはガツクリと肩を落とす。

「あ、あと、気になる点がもう一個あった！」

思い出したように、ユークが言うと、皆は首を傾げる。

「ほら2回目の魔法攻撃が来た後、一瞬辺りが光ったでしょ？」

あれが何だったのか……

「ああ！何か光ってたね、そう言えば。」

魔法じゃ……ないんだよね、きつと。何だろ？」

マティーナがポンと手を打つと、皆も思い出したらしく、考え始めた。

「案外魔法かもしれないよ？」

「ええ……？ライナ、どういうことだい？」

確かに、魔法を放つときにああいう光が放たれることもあるけど……。

あんな広範囲に渡って光ったりしないでしょ？」

魔法を扱うユーク、ライナ、セフィークはその事についてよく解っていた。例えば、魔法を放つ際に手をかざすと、その手を中心とした光の円 魔方阵が浮かび上がる。それが一瞬だけ強い光を放ち、魔法が発動するのだ。

「でもさ、私、聞いたことあるんだけど。」

特殊な魔力石を持つ魔法使いは、特殊な魔法が使えるんだって。

特殊な魔法だったらさ、あんな光を出すこともできるんじゃないかな……って」

ライナが相変わらずのゆったりした口調で話すと、セフィークは「へえ……」と感心した。そして、何かが頭に引っかかり、首を傾げ始める。

「…あれ…？特殊な魔力石…？」

どこかで通常の魔力石とは違うものを見た気がして、セフィークはどうにかして思い出そうと必死になる。

「？セフィーちゃん？どうかした？」

ティバロが悩むセフィークの顔を覗き込む。だが、考え事をしてい  
る彼女はそれも全く気に留めない。そんな彼女の脳裏に、ある言葉  
が過った。

これ、ここに付いてる石は魔力石なんです。だから、私は魔法使  
い。残念だけど…。

「鷹ノ巣」で仲間を集めていたセフィークが、その誘いを断られた  
あの時、あの女性はそう言っ  
て自分の腕輪を見せてくれた。変わった武器だな  
としかその時は思わなかった。しかし、今になって考  
えてみれば、特殊  
としか言いようがない。

「あの人だ…！」

突然、セフィークが大声を上げたので、皆は驚きのあまり、目を丸  
くしてしまった。

「あの人…？」

「ほら、私が仲間に誘った人！」

あの人何も武器持つてなくて、腕輪に魔力石が付いてたの。魔法  
使いなんだって」

皆が「ああ、あの人か」と頷く中、ティバロはしばらく首を傾げて  
いたが、武器の持つていないということから、登録した時に同時に  
出てきた女の事だと推測した。

「確かに、腕輪に魔力石が付いてるなんて、特殊  
だけど…。

それだけで決め付けるのはどうかと思うよ？

…何にせよ、今は何もできないね」

ユークはまとめる形で話を終わらせると、立ち上がった。皆も、確  
かにその通りだと思い、小さく溜息を付くと立ち上がり、レストラ

ンを後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7310/>

---

荒れ鷹

2010年10月11日14時39分発行